

谷には其實落て松多し、杉有所は又杉多し、其心を以て栽るとなり、作り木、又は珍敷木、杯植て悪し、何となく木深く、樹竹共に天然の體にすべし、

〔茶話指月集^上〕宗易露地の樹は、凡松竹、また木には茱萸をうへたり、織部は僧正が谷にて、樅の木のものふりたるをみて面白思ひ、はじめて庭にうつす、

〔茶傳集^{十二}〕一利休露地に桐木をうへ申は、古歌に、

桐の葉もふみわけがたくなり、にけりかならず人を待となけれど、此こゝろにてうへたるとなり、

〔和泉草^三〕路地

一古路地松竹ヲ植シ也、近代サマノ結構也、モミノ木ハ古田織部植初シ也、南天ハ桑山左近植初シ也、

〔茶之湯六宗匠傳記^三〕古田織部殿自筆の寫

一敷寄屋の植込の内に、たんほゝの木を植て有、是は花有木也、總じて敷寄屋かこひの庭には花有木をきらへども、植給ふ、山鳩をうへごみの内に置なかせ給ふ、

〔茶道早合點^上〕飛石

ふみ石の外にある、あいまらいの石をひかへいしと云、脇へはなしてすゆるを捨石といふ、

〔茶道筌蹄^一〕庭之部

飛石 一番石は石の上へあがりて、坐敷の敷居へひざのかゝる高サをよしとす、壁より六寸明キ、二番石の高サは、一番石と三番との間也、一番と二番との明キは、草履を横に入る、程次第次第に此明キなり、三番石より高サ二寸、

但し三番石を定め高サ二寸也、二番を居ゆるに、一と三と見合て、其後に二番を定る也、